

後悔予期尺度作成の試み

上市秀雄

(筑波大学大学院システム情報工学研究科)

キーワード：後悔予期，適応的行動，個人差

Development of an Anticipated Regret Scale

Hideo UEICHI

(Graduate School of Systems and Information Engineering, University of Tsukuba)

Key words: anticipated regret, adaptive behavior, individual differences

目的

後悔予期(anticipated regret)とは、“ある決定をしたと仮定して悪い結果が生じた場合に、どの程度その決定について後悔するのか”という、意思決定前に予期された後悔感情である。

この後悔予期はリスク回避行動と関連性がある。たとえばギャンブルに関しては、後悔予期とリスク認知が高い人ほど、ギャンブルに対して否定的な傾向がある(Li, Zhou, Sun, Rao, Zheng, & Liang, 2010)。性行為に関しては、無謀な性行為を行なう若年者は、自分の性行為がどの程度危険であるか(望まない妊娠、性病感染リスク等)を理解しておらず(後悔予期が低い)、このようなリスクが生じたことを後悔している(Richard, van der Pligt, & de Vries, 1996)。さらに後悔予期は、よりよい生活を営むために必要な適応的行動との関連性も示されている(Ueichi & Kusumi, 2008)。つまり後悔を予期することは、意思決定の際のよい選択行動や、意思決定後の適切な対処や行動を促すことが期待できるのである。

よって本研究では、後悔予期尺度を作成し、その信頼性と妥当性について検証する。

方法

質問項目 後悔予期尺度 後悔予期には、失敗・後悔に対して敏感かどうか(失敗・後悔感受性)、将来悪い出来事が起こることを予測しているのかどうか(将来の出来事予測)、どうすれば将来の後悔を回避できるのか(後悔回避可能性)が重要と考え、特定状況に依存する文言にならないように28項目を作成した。

リスク回避行動 上市・楠見(2004)の身体的状況(例:インスタント食品は食べない)、金銭的状況(パチンコをやっている)、人生に関する状況(将来の人生設計を考えている)を参考にして作成した。

適応的行動 ネガティブ感情への対処法やよりよい行動への改善等を測定する項目。上市・楠見(2004)、Ueichi & Kusumi(2008)を参考に、反省、合理化(今後役に立つ)、自己正当

化(言い訳する、失敗を受け入れない)、後悔傾向などを作成した。上記項目は7段階で評定(1:あてはまらない~7:あてはまる)した。

調査対象者 首都圏の大学生、大学院生62名(男性54名、女性8名)。2011年4月に質問冊子を配布回収した。

結果と考察

因子分析の結果 仮定した3因子(将来の出来事予測、失敗・後悔感受性、後悔回避可能性)が抽出された(表1は結果の一部)。

信頼性 後悔予期尺度の各項目について、G-P分析(4分位パーセンタイルの第1パーセンタイルと第4パーセンタイルとをt検定)をおこなった。その結果、全ての項目で有意だった。

妥当性 各因子の因子得点と、リスク回避行動および適応的行動との相関を調べた。その結果、各因子とリスク回避行動間の関連性はそれほど明確ではなかった。

適応的行動との関連性に関しては、将来の出来事予測や後悔回避可能性傾向の高い人ほど、自分の失敗を反省し、合理化する傾向が高かった。それに対し失敗感受性傾向の高い人は、失敗から学ぶことができず、自分の失敗を受け入れず自己正当化する傾向があった。これらのことは、よりよい生活をするためには、将来の出来事予測や後悔回避可能性傾向を高め、失敗・後悔感受性を下げることが重要であることを意味している。

本尺度にはある程度の信頼性と妥当性があると考えられる。

引用文献

Li, S., Zhou, K., Sun, Y., Rao, L., Zheng, R., & Liang, Z. (2010). Anticipated regret, risk perception, or both: Which is most likely responsible for our intention to gamble? *Journal of Gamble Studies*, *26*, 105-116.

Richard, R., van der Pligt, J., & de Vries, N. (1996). Anticipated regret and time perspective: Changing sexual risk-taking behavior. *Journal of Behavioral Decision Making*, *9*, 185-199.

上市秀雄・楠見孝(2004). 後悔の時間的変化と対処方法: 意思決定スタイルと行動選択との関連性. *心理学研究*, *74*(6), 487-495.

Ueichi, H., & Kusumi, T. (2008). Structural equation modeling of risk avoidance in everyday life. *New Trends in Psychometrics: Universal Academic Press*. 491-500.

表1 後悔予期尺度の因子分析結果の一部(最尤法, プロマックス回転)

	予測	感受性	回避
・将来のことはどうなるかわからないので、この先どうなるかについて考えもしなかったら自分が思っていた結果よりももっと悪い状態になってしまっていた場合、 「こんなことならずと先のことまで考えておけばよかった」と思う	.825	-.019	.057
・事前に予想できないくらい最悪の事態におちいってしまい、その事態に適切に対処できなくなった場合 「こんなことなら最悪の事態も考えておけばよかった」と後悔すると思う	.816	.031	-.182
・めったに起こらないことなので、そんなことが起こることを考えもしなかったら、それが起こってしまい、その事態に適切に対処できなくなった場合、「めったに起きないことであっても起こった場合のことを考えておけばよかった」と後悔すると思う	.765	.010	-.245
・何をしても、うまくいった場合のことよりも、失敗して後悔した場合のことを考える	-.187	.740	.049
・最善のことはしたとしても、失敗したことが気になってしまう	.236	.734	-.065
・何らかの決定をするときにはいつも、「もしこの決定をして失敗したら、この決定をしたことをどのくらい後悔するだろうか」ということを考える	.158	.566	.004
・たとえ悪い結果になったとしても、早めに決めたときのほうが、できるだけ決定を先延ばしにしたときよりも、後悔は小さいと思う	-.044	-.030	.821
・何らかの重要なことを決める時に、その決定を遅らせれば遅らせるほど後悔する可能性は高くなる	-.053	.066	.684
・「一所懸命やったとしても、たぶんうまくいかないだろうな」と感じながらも「がんばってやってみよう」と思って一所懸命やってみたが、結局予想した通りうまくいかなかったとしても、「がんばってやってみてよかった」と思う	-.042	.012	.511